

を受け易く、この点は大学側で解明されるべき材料物理的要素を含む基礎問題でありながら、技術的な困難さから、成膜プロセス雰囲気の高純化に関する研究は、当初十分に行われていませんでした。この主たる原因は、大学側の研究設備導入にともなう経費負担が科研費等の予算規模では、到底、不可能なことが第一に挙げられます。一方で、この様な設備を生産する設備メーカーは、より高度な生産機の開発を、また、媒体生産メーカーは、それらの設備を導入しながら、より性能のよいディスクを生産供給せねばならないという開発責務を資本の

論理枠の中で負っていかねばなりません。この様な状況下、幅広い基礎研究実験を通し、様々な技術開発に対して現在かつ将来に亘って、強い説得力をもって民間に対して理解されるような定見をもつ大学の講座が強いリーダーシップのもと、産業界を指導するという形態をとろうとするならば、研究経費の有無に関わらず、大学主導型の産学共同研究は自然発生的に始まるものと考えています。今後も同窓生諸兄の御指導、御鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

夢をかたちに

富士通アクセス株式会社
代表取締役社長

中 村 隆



私は1971年稲場研究室卒業後、富士通に入社しました。研究室の頃は、当時若かった伊藤弘昌先生と何度も蔵王にスキーに行ったり、通研内のマラソン大会では稲場研内は予選会までして優勝したりと数々の楽しい思い出をつくらせて頂きました。

入社時の面接で光通信関係の部署への配属を希望しましたが、当時のメインフレーム部門でCCPと言われる通信制御装置の開発を担当し、以来30数年ネットワークのビジネスに従事してきました。

昨年より関係会社の富士通アクセスで、家庭やオフィスにFTTH等の光回線をお届けするビジネスを担当しており、とうとう卒業の頃に希望していた仕事への関わりにたどり着いた思いです。その過程でいろんなお客様や企業の方々とおつきあいがあり、今から思うと大変貴重な財産のように思われます。例えばDIPS開発ではNTT横須賀通研に何日も泊り込んでNTTの方々テストしながらバグ潰しをしたり、あるいは米国アムダール社と共同でIBM互換機を開発した際には、自分のあまりの英語の下手さと相手との考え方の違いに嘆息しながら、何度もサンノゼとの間を往復したりもしました。またシステムがIP化されるのに伴いルータビジネスを担当し、外国ベンダーと競合したり、米国CISCO社とアライアンスを結んだりといういろいろ紆余曲折もありました。さらには中国へのビジネス展開を図り、現地ベンダーの壁に苦しんだ経験もしましたが、中国の若いエンジニアの熱意ある眼差しは、IBMやCISCOに追いつき追い越せと頑張っていた頃を思い出させられました。

今振り返ってみるとビジネスも製品開発も、戦略や能力もさることながら情熱や愛着といったものがなければ

成功しないと感じています。しかし一方で改めて申し上げるまでもなくシステムやネットワークがオープン化された頃から、当社のみならず日本の技術、製品が海外勢の後手にまわった感が否めません。このままでは日本のICTシステムを支える技術が、すべて他国依存になってしまうのではないかと危惧されています。

昨年、当時ITUの内海事務総局長の講演を聞く機会がありましたが、その際にも日本は技術はありながら世界のマーケット、潮流をみていなかった。グローバルボーダレス化している中で世界と共同で開発する意識が必要という主旨のお話がありました。私も元技術者（随分昔ですが）として、やはり我々企業の間にもっとグローバルな場での技術議論や連携、ビジネス展開をすすめるべきだと痛感しています。

先日、通研で編集された「ICT Dreams 73人のRIEC研究者の夢指標」という本を拝見しました。サブタイトル“夢は必ず未来となる”というもので、たくさんの次の社会に向けた新しいタネが研究されているように感じました。また11月に東京で開催された電気・情報フォーラムでも多くの研究成果が発表され、また東北大学は産学連携に関する産業界からの評価も大学ランキングで2位と伺いました。こういったビジネス、実務レベルでの大学と企業の共同研究や特に世界へのその成果の発信を今まで以上に進め、先端技術でのリーダーシップを取り戻したいものだと考えます。日本は素晴らしい素質をもった研究者や技術者がたくさんおり、一方で安価にふんだんに張りめぐらされたブロードバンドおよびモバイルネットワークという世界一の環境を持っている訳であり、それは十分に可能であると確信します。

それにしても東北大学の学科から、電気や通信、電子という名前が消え、情報という言葉すら少なくなったとのことであり隔世の感があります。我々の頃の分教場のような仙台駅も立派なビルに変わり、東京まで急行“松島”で確か6時間位かかったのが、いまや新幹線で1時間40分程度。しかし仙台で、東北大学で学び、遊び、飲んだ記憶は同じです。ビジネスの世界でも出身が同じということできつあいが深まったり、助けて頂いたことも度々です。これからも同窓の輪を大事にしていきたいと思っています。